

[31]

氏名	劉重越 ^{りゅうじゅうえつ}
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第93号
学位授与の日付	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	一九三〇年代大阪のアジア主義の研究 —東方文化聯盟を中心に—
論文審査委員	主査 准教授 池尻 陽子 副査 教授 吾妻 重二 副査 准教授 吉川 和希 専門審査委員 名誉教授 陶 徳民

論文内容の要旨

劉重越氏の論文「一九三〇年代大阪のアジア主義の研究—東方文化聯盟を中心に—」は、1930年代に大阪を拠点に活動したアジア主義団体「東方文化聯盟」（以下、聯盟と略称）について、成立から終焉までの聯盟の全体像を提示するとともに、聯盟の構成員および活動実態からその特徴を論じる実証的研究である。

論文の構成は以下の通りである。

序論

第一章 東方文化聯盟の起源と成立過程

第二章 『東方文化聯盟会誌』から見る聯盟の活動

第三章 東方文化聯盟中核メンバーの重要活動

第四章 東方文化聯盟と中国—1934年清水銀蔵の中国旅行を中心に—

第五章 東方文化聯盟とインド—インド成員の人種平等論を中心に—

第六章 東方文化聯盟と満洲移民

—「試験移民期」における大阪財界の活動を中心に—

第七章 日中全面戦争勃発後東方文化聯盟の活動

結論

参考文献一覧

付表一～三

序論では、東方文化聯盟が成立する歴史舞台の背景として、近代におけるアジア主義思想台頭の歴史を概述した上で、関連する先行研究を整理しつつ東方文化聯盟に着目することの意義を論じている。

第一章「東方文化聯盟の起源と成立過程」では、政治家の清水銀蔵が聯盟を創始した経緯を、清水の人脈・時代性・地域性の観点から考察している。犬養毅や萱野長知らに触発された清水銀蔵が、相島虚吼、内藤湖南、佐多愛彦ら関西地区の名士たちと連絡し、またインド独立運動家のサハイやボースの支持を取り付け、約1年半をかけて聯盟を設立した過程を明らかにしている。

第二章『東方文化聯盟会誌』から見る聯盟の活動』では、東方文化聯盟の機関誌である『東方文化聯盟会誌』の発行状況と誌面の構成について論じている。1932（昭和7）年12月10日の創刊号から、1941（昭和16）年10月20日発行の最終刊第十九号までを精査し、誌面の特徴や変化を分析し、そこから聯盟の活動内容の変遷や、外国人構成員の投稿としては中国人よりもインド人のものが多いなどの特徴を明らかにしている。

第三章「東方文化聯盟中核メンバーの重要活動」では、内藤湖南、清水銀蔵、佐多愛彦をそれぞれ取り上げ、三人の活動を通して聯盟の草創期から終焉までの活動の特徴を検討している。内藤は「思想のアジア主義」、清水は「外交戦略のアジア主義」、佐多は「行動のアジア主義」として聯盟の活動に影響を与えたと分析する。一方で、三者の異なる傾向に本質的な違いはなく、手段と方式の違いに過ぎないとも指摘する。

第四章「東方文化聯盟と中国—1934年清水銀蔵の中国旅行を中心に—」では、聯盟の精神的指導者であった内藤湖南の逝去後に清水銀蔵が行った中国視察旅行を取り上げ、内藤没後の聯盟を清水がどのように舵取りしようとしたのかを詳細に論じている。日中関係が悪化していく中で、清水が初期アジア主義の平和協調路線を堅持しつつ日満文化協会との繋がりを得るなど対外発展に道を開こうと尽力していたことを明らかにした。

第五章「東方文化聯盟とインド—インド構成員の人種平等論を中心に—」では、聯盟の最大の特徴ともいえるインド人構成員について、ラース・ビハーリー・ボースやアナンド・モーハン・サハイらの活動の詳細とともにその存在感の大きさを論じている。聯盟は設立当初からインド独立運動家らとの接点を持っており、そのことが反植民的な聯盟の基本精神にも影響を与えていると指摘する。

第六章「東方文化聯盟と満洲移民—「試験移民期」における大阪財界の活動を中心に—」では、大阪における満洲移民の状況について、移民政策の最初期にあたる1931年からの「試験移民期」における大阪経済界の関与を中心に論じている。第四章で論じた清水銀蔵の中国視察ともリンクする内容で、東方文化聯盟の主体的な活動を前景化させることで先行研究にはない満洲移民政策と大阪財界との関わりを提示することに成功している。

第七章「日中全面戦争勃発後東方文化聯盟の活動」では、1937年の日中全面戦争勃発から1941年『会誌』発行停止までの聯盟の活動状況とアジア主義思想の転換を論じる。聯盟が活動期間の末期に大アジア主義へと転換を余儀なくされていった状況は先行研究でも指摘されているが、本論文の第六章までの議論を踏まえてこの時期の聯盟の変節を再整理することで、聯盟が政治的な独立性を保持できなくなっていくこの時期の情勢描写に深みと

説得力を加えている。

結論では、アジア主義における右翼的思想と左翼的思想には双方に通底する要素が多分にあることを指摘した上で、各章で論じた聯盟の特徴を整理して提示する。

論文審査結果の要旨

劉重越氏の論文は、東方文化聯盟という団体について、構成員の顔ぶれや機関誌の発行状況などの外形的な事柄から、聯盟の活動内容の変化や主導者の言動、人脈といった内実に至るまでを分析の俎上におき、聯盟の全体像を隈なく描き切ろうとした意欲的研究である。ある一時期、一側面のみを取り上げる研究では示せない厚みと説得力を有する本論文の研究成果は、以下の点に特にあらわれていると思われる。

第一に、聯盟の特徴について、『東方文化聯盟会誌』などから会員の構成や活動内容を丹念に拾い上げて分析し、提示している点である（第二章、第五章、第六章）。他のアジア主義団体とは一線を画す聯盟の在り方や特徴を「初期アジア主義を受け継ぐ関西財界人団体」として指摘し、過剰に評価することなく冷静に喝破している。研究対象としての東方文化聯盟が、アジア主義団体の一例としてのみにとどまらない可能性を有することを示しており、本論文の提起する論点の重要性を補強しているといえる。

第二に、聯盟の主導者の言動や人脈を丁寧に掘り下げ、整理している点である（第一章、第三章、第四章）。とりわけ、聯盟の創始者である清水銀蔵の人脈と活動を克明に論じている。内藤湖南や犬養毅、萱野長知、インド独立運動家のボースやサハイといった人物との交流によって自身のアジア観を涵養していった清水が、初期アジア主義的思想の実践の場として東方文化聯盟を設立した経緯を活写したことは、本論文の大きな成果といえる。

第三に、聯盟におけるインド人構成員の存在感について、『会誌』の講演録などから彼らの聯盟における主張や活動を抽出して示すとともに、各時期における聯盟の方向性との共鳴や葛藤を明らかにした点である（第五章）。設立当初から一貫している日印関係重視という聯盟の大きな特徴について、大阪の財界人を中心に構成されている聯盟の性質と併せて論証されており、説得力がある。

第四に、本論文が東方文化聯盟に関する初の包括的研究として、体系的かつインフォーマティブな性質を備えている点も評価に値する。特に、東方文化聯盟の機関誌『東方文化聯盟会誌』については、第二章で発行状況や誌面の特徴を専論した上で、本論文末尾に付録として『東方文化聯盟会誌』の理事・評議員の名簿および会誌各号の目録を整理して付している。東方文化聯盟研究の基礎的データを提供するもので、今後の研究発展に資する貢献であるといえる。

このように、劉重越氏の論文は、東方文化聯盟を正面から包括的に取り上げる初めての研究として、新規性と厚みのある研究成果を示すとともに、東アジア近代史研究の可能性を広

げる視点を提供するものとして高く評価できる。全体として叙述が冗長である点や、先行研究で示されているアジア主義の類型を無批判に援用している点などが憾まれるが、本論文の学術的価値を損なうものではないと判断する。審査委員からは、石橋湛山の小日本主義との関連や、聯盟によるインド独立運動への経済的支援の実態など、今後より深めていくべき論点も指摘され、本論文の研究成果を土台として今後さらに研究を進展させることが期待される。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。